

# 愛ランド通信

～人と動物の共生を目指して～

平成29年度冬号

## 犬 & 猫の飼い方 注意情報

### ジワジワと襲ってくる低温やけどの恐怖

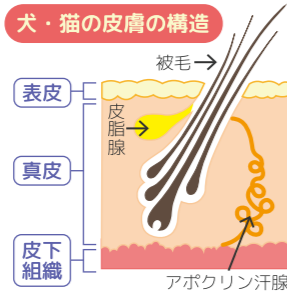
暖房器具が手放せないこの季節。ペットがこたつの中やストーブの前などでぐすり眠っている時、起こすのは可哀想とそのままにいませんか？でもそれは危険！やけどには、熱いものに触れた時に起こるものと、体温より少し高めの温度に長時間触れ続けたときに起こる低温やけどがあります。シニアや病気のペットなどは、同じ場所で体勢を変えないで寝ていることが多いため、低温やけどになるリスクが高まり、飼い主さんが気づいたときには重症になっていたということも!!

### 手術が必要なことも

人間も動物も皮膚の構造は、**表皮、真皮、皮下組織**に分かれています。軽い表皮のやけどなら2、3日で治りますが、低温やけどでは、飼い主さんが気づかぬうちに真皮の深いところまで損傷が及ぶ重症になることも少なくありません。完治するまでに1カ月以上かかったり、皮下組織まで壊死すると手術が必要になることがあります。

### 低温やけどかなと思ったら

暖房器具の近くが好きなペットが体の同じところばかり舐めたり、触ると嫌がる、脱毛しているなどがあれば低温やけどの疑いもあります。自分の判断で手当てをせずに、まず動物病院の指示をあおいでください。連れて行くときは、患部を舐めないようにガードすることも必要です。



### 暖房器具の注意点

ホットマット、ホットカーペット、床暖房、湯たんぽなど、ペットの体に接触して使う暖房器具の場合、共通する注意点としては、直接体に触れないように工夫することです。ペット用でも必ずカバーを掛けるか毛布でくるみ、敷いて使うものにはその上にラグやマットを置くようにしましょう。人が触ってほんのりあたたかい程度が犬や猫には適温なので、もし熱かったら温度を下げるか切ってください。ケージの中に暖房器具を置く場合は、暖房器具を置かないスペースを作ることも必要です。

**使い捨てカイロ**は、開封し1時間から90分ほどで最高温度に達し、40～47℃が12～16時間続きます。カイロは厚手のカバーで包み、ガムテープやゴムなどでしっかりと縛り、カイロが飛び出さないようにしてください。また、時間がたつて冷めてしまうと安全と思いがちですが、カサカサと音があるので、興味を持って袋を破ってしまう恐れもあります。使い捨てカイロの主原料は鉄なので、食べると激しい嘔吐や下痢をしてしまいます。

**こたつ**といえば猫というほど猫はこたつが大好き。でも、こたつは危険がいっぱい。低温やけどだけではなく、酸欠や脱水を起こすリスクもあります。ペットがこたつに入ってきたらまず温度を一番低くしてください。長時間の連続使用は避け、時々こたつ布団をめくって空気の入替えや、同じ体勢で寝ていたら体の向きを変えてあげましょう。(M・I)



## インタビュー

センターから譲渡されたワンコその後、どうしていますか？

## 家族に迎えて

「保護されている犬を助けたい」という思いからセンターを訪れた池田さんは、昔から犬や猫など常に動物に囲まれた生活を送っていました。そんな池田さんが譲り受けることに決めたのは僧帽弁閉鎖不全症という治療困難な心臓の病気を持つ13歳のチワワ「JJ(ジェイジェイ)」くんでした。

トライアル開始から1週間ほどたったある日、JJくんの様子がおかしいと感じ、センター横の夜間動物救急センターを受診すると、持病の心臓病が原因の肺水腫を発症していました。そのまま一晩入院し、翌日も自宅近くの動物病院に入院して一命を取り留めました。そんな状況のため、センターから「譲渡を中止しても構わない」と申し出がありましたが、池田さんは「縁があったうちに来たのだから」とそのまま飼うことを決めました。

今でも2週間に一度通院し、朝晩お薬を飲ませているとのこと。現状維持か、悪くなるかしかない病気ですが、今は「とても元気です」と獣医さんもおっしゃっているそうです。理容師の仕事で忙しい池田さんですが、日中はお母さ

## 病気はそんなに大変じゃない

高齢で持病のあるチワワを譲り受けた池田玉路(たまち)さん。お母さんの智子(さとこ)さんは犬にとっても頼れるお母さんです。



▲とってもキュートなJJくん。以前より顔つきも穏やかになったそうです。



▲大好きなお母さんと。どこへ行くにも一緒に。お母さんの智子さんがJJくんのお世話をされています。病気については「そんなに大変でもない」とおっしゃられ、むしろ楽しんでお世話されているようでした。持病のある犬は譲渡対象として敬遠されがちですが、動物好きの家族に迎えられ、安心できる場所を見つけたJJくん。本当によかったなあと思います。これからも長生きしてね。(atk)

知っておこう  
**避妊・去勢手術の正しい知識**

▲雑種 約3ヶ月齢  
▼雑種 オス 約10歳 施設名:カプリン  
▲雑種 オス 9~10歳 施設名:ボン  
▲雑種 メス 1歳 施設名:笑美(えみ)

愛犬・愛猫を家族に迎えたら、必ず考えなくてはいけないことが避妊・去勢手術(以下、手術)です。動物病院からは手術を勧められますが、手術をためらう人も少なくありません。

### 避妊・去勢手術はかわいいそう？

手術をしない理由がよく聞かれるものに、「病気でもないのに手術するなんて・・・」「人間の勝手で繁殖能力を奪うなんて自然ではない」というものがあります。動物の繁殖能力を奪うという行為に違和感や抵抗感を抱く方は少なくありません。「人間の勝手である」ということも間違いではないと思います。では、動物にとっては手術しない方がよいのでしょうか？

手術に関しては様々な意見があり、とてもデリケートな問題です。だからこそ飼い主が正しい知識を持ち、愛犬・愛猫の快適な暮らしのために責任を持って判断しましょう。

### 『ストレスの軽減』『病気の予防』『繁殖の防止』そして『災害時への備え』

平成26年12月に京都府・京都市共同で制定された京都動物

愛護憲章では、「人と動物が共生できるうるおいのある豊かな社会」の実現を目標として掲げています。飼い主と動物だけでなく、その周囲の人もストレスなく暮らすことのできる調和のとれた社会を目指すうえで、手術にはどのようなメリットがあるのか考えていきましょう。

### ストレスの軽減

犬猫には繁殖本能、危機回避本能、捕食本能があり、野生下で生きていくためにはどれも欠かすことができません。特に繁殖本能は子孫を残すための強い欲求であり、満たされないことは強いストレスとなります。しかし、飼育下では、安全な環境と十分な食事、捕食行動を満たすための遊びなどは提供できますが、動物の欲求のままに繁殖させることはできません。繁殖の欲求やそれが満たされないストレスの結果、徘徊や脱走、破壊行動、攻撃性、自傷、過度なマーキング、発情期の鳴き声などが問題行動として現れれば、一緒に暮らす人にとっても大きな負担となり、周囲の人に迷惑がかかることもあります。手術をすることにより、繁殖の欲求がなくなり動物のストレスも軽くなります。また、問題行動も減るので、動物と人双方にとって暮らしやすくなるのではないのでしょうか？

編集後記

避妊・去勢に関して調べていて、みなさんがとても悩んでいると感じました。手術は自分の体に関する判断もとても難しいです。それが愛犬、愛猫のこととなると決断することに躊躇してしまう気持ちはあって当然だと思います。この記事で少しでも不安を取り除くお手伝いできたならと・・・と思います。すべての命の幸せを祈って。(A.N.)

本誌は「京都市人と動物が共生できるまちづくり基金」からも出資していただいています。まちづくり基金に寄附していただいた方のお名前はホームページにて公開しています。なお、寄附の方法についても、こちらのホームページでご覧いただけます。

京都動物愛護センター 検索

### センターへのアクセス

- 近鉄十条駅から徒歩5分
- 京都市営地下鉄烏丸線 十条駅から徒歩15分
- 京都市営バス 十条大宮停留所から徒歩5分

※無料駐車場はございません

〒601-8103  
京都市南区上鳥羽仏現寺町11番地  
電話：075-671-0336  
FAX：075-671-0338  
開所時間：午前9時～午後5時  
休所日：木曜日(祝日の場合は翌金曜日) 年末年始

京都動物愛護センター  
マスコットキャラクターの  
LINEスタンプはこちらから  
↓

発行：京都動物愛護センター 平成30年2月1日

## 病気の予防と手術のリスク

生殖器（卵巣・子宮・精巣・前立腺など）の病気は、年齢とともに増加します。手術を行うことにより、生殖器疾患や性ホルモンに関連する疾患（子宮卵巣疾患、精巣腫瘍、乳腺腫瘍、前立腺疾患、会陰ヘルニアなど）の発生率を減らすことができます。メスでは最初の発情前に避妊手術を行うことで、乳腺腫瘍の発生率を大きく減らすことができます。

手術は全身麻酔で行われますので、動物の状態や体質などにもよりますが、もちろんリスクがあります。ただ、病気になったらその時に手術すればいいという意見もありますが、病気や加齢によって健康状態が悪化するほど麻酔の危険性はより高くなり、その時に必ずしも手術できるとは限りません。ということも忘れないでください。



▲避妊手術後（約1週間）の腹部の様子

## 繁殖の防止

平成 28 年度、京都では 908 頭の猫が殺処分となっていますが、その多くは、野良猫が繁殖して生まれた子猫であり、春先の繁殖期には多くの子猫がセンターに収容されます。施設

の収容限界で殺処分せざるを得ないこともあります。幼若すぎで育成が困難なものや、親からはぐれ健康状態が悪いものなど、施設に残せないケースが数多く見受けられます。野良猫を減らすには、保護し、適正に飼養することが第一ですが、これ以上不幸な猫を増やさないため、京都市内では、地域住民と行政の協働により、野良猫の避妊・去勢を行うまちねご活動が取り組まれています。

また、家庭内での猫の繁殖も近年問題となっており、多頭飼育崩壊（※後に詳しく記載）が各地で発生しています。一人の人が快適な生活を守りながら飼育できる動物の数は限られています。安易な繁殖を避けるためにも手術は必要です。

繁殖防止が目的なら、手術はオス、メスどちらかでのよいのでは？ 1 匹しか飼っていないからしなくてもよいのでは？ という話もありますが、1 匹でも手術を行い、オス・メスどちらも手術の方がよいと考えます。オス猫は脱走した際に外で妊娠させる可能性があり、メス猫の場合も脱走した際の妊娠、そして、飼い主の知らない間に外からオス猫が侵入し、妊娠してしまうことも実際にあります。

## 災害時への備え

東日本大震災や熊本地震では、多くの犬猫が家の外へと逃げました。避妊・去勢をしていなければ繁殖し、増えてしまいます。野生化すれば、その地域の生態系にも影響がでるでしょう。また、避難所では動物同士の距離が近い場合、手術をしていなければ強い性的ストレスにさらされ、未去勢の犬同士がケンカをするトラブルも発生しています。災害時に動物達の命をどう守るか。日ごろから考え、話し合い、備えをしておくことが大切です。

犬猫は、長い歴史の中で、家畜化され、人が暮らしやすいように

## 避妊・去勢手術の メリット・デメリット

### ～メリット～

望まない繁殖を避けられる

性的ストレスの減少

性ホルモンが関わる問題行動の減少  
(マーキング、徘徊、ケンカなど)

生殖器に関わる病気の予防

### ～デメリット～

繁殖能力がなくなる

全身麻酔によるリスク

太りやすくなる

都合よく作り変えてきた動物です。ですから、私たちは彼らが幸せで快適に暮らせるようにその一生を見守っていく責任があります。その子を家族に迎えたなら、ぜひ人と動物どちらにとっても最善の選択をしていただきたいと思います。(A.N.)

## たとうしくほうかい 多頭飼育崩壊（アニマルホーディング）

この言葉を聞いたことはありませんか？

避妊・去勢をしないで飼育することで動物が過剰に繁殖を繰り返した結果、飼い主が管理できないほどに増えてしまい、最終的には飼育放棄に至るという問題です。無知なまま動物を飼い始めた結果、増えてしまったという場合のほか、飼い主が心に何らかの病をかかえているために『アニマルホーダー』と言われる状態となっている場合があります。

ほとんどの場合、ゴミが散乱した不衛生な環境で多数の動物たちが飼育されており、満足なえさもなく、病死、餓死、共食いなどが頻繁に起こっています。また、近隣から鳴き声や臭いなどで苦情が入ることもあり、社会問題となっています。家の中という密室のため発覚しにくく、飼い主も外へ相談することをためらうため、発覚時は問題がより深刻化しています。特に猫の事例が多くありますが、犬やウサギの事例もあります。

様々な原因が複雑に絡んでおり、解決の難しい問題です。



▲猫の多頭飼育崩壊現場  
高齢の家庭で、最初に飼い始めた3匹に避妊去勢手術をしていなかったため、数が増え、管理できなくなったもの。排せつ物などで床や天井が腐って抜けており、普通の生活ができない状態。  
写真提供：動物愛護団体ランコントレ・ミグノン

### 「行ってきました！ 第5期ボランティア養成講座」

センターでこんなことやっています！

平成29年11月11日(土)、今年で5期目となる京都動物愛護センターボランティアスタッフを育成するための「養成講座(第2回)」が行われました。今年も45名の研修生たちが、来春からのボランティアとしての活動に備え、10月から半年間にわたり活動に必要な知識を学んでいきます。

ボランティアの基本的な活動内容は、センターに来館される方に応対する「案内活動」とセンターに保護されている猫の世話や社会化のためのふれあい、犬の散歩などをする「管理活動」です。その他、児童向けの動物愛護普及イベントを実施したり、機関誌やセンター内の掲示物の作成といった活動もあります。

この日の講義の内容は「犬猫の保護や譲渡事業など動物愛護行政に関する制度」。難しい内容でしたが、「ペットロスをきっかけに」、「自分になにができるのか」、「少しでも多くの幸せを与えることができれば」、「目をそらしてきたことに向き合えなければ」といったボランティア応募に当たった強い思いが、熱心にメモをとる姿に表れていました。講義の締めくくりに行われた質疑応答では、多くの意見が交わされ、時間が押すほど。また、センターへの印象は、「明るくキレイ」、「緑が多い」、「清

潔で匂いを感じさせない」、「雰囲気があたたかい」と聞いて嬉しかったことばかりでした。

これから現地実習と、まだまだ重要な研修が待ち受けている研修生たち。春には、センターの初々しい新たな力として、来館者に感じていただきましょう。

(4期ボランティアスタッフ T.O.)



▲講師をしたセンター職員と奥野獣医師

### ボランティアがきっかけで つないだ小さな命

ボランティア2期生 青木孝典&ネル、モコ

▼ご飯を待つネル(左)とモコ(右)

ネルとモコとの出会いは、夏の終わりの雨の夜のこと。近所で衰弱した子猫が二匹いると妻から聞き、放っておくと猫風邪で死にそうな状況でした。とにかく動物病院で治療するため、一時的に保護することにしました。

正直、もし私がボランティアをやっていなければ、この子たちを保護することはなかったと思います。ボランティアをやっていたおかげで、飼ったことのない猫の扱いにも慣れることができ、センターで動物愛護について学べたからこそ保護に踏み切れたのだと今になって思います。

保護した子猫は、タイミングよく動物病院で治療ができたお

かげで、命を落とすことなく元気になってきたので、新しい家族探しを始めました。それは初めての経験でしたが、心強かったのは経験豊富なボランティア仲間のアドバイスや協力です。子猫の1匹は片目がいないこともあり、仲の良い姉妹と一緒に考えましたが、現実には厳しいもの。2匹一緒にもらっていただける方はなかなか現れません。

そして里親探しの結果は…我が家の家族の一員に！  
今では1歳半になったネルとモコは、いつも陽気なふたり組み。ゴロゴロ言いながら甘えてきて、どこを触られても嫌がりません。モコは肩にのるのが大好きで、手をグーパーグーパーしながら「ニャー！」とテンションマックス。

夜帰宅すると2階の窓から熱い視線を感じて見上げると、ネルとモコがやっと帰って来たかと言わんばかりに見おろしています。そして、家の扉を開けると、ネルとモコは玄関に座っていて、元気に「ニャー！」と言って、疲れも吹きとぶお出迎え。

「ただいま！ネルとモコ。ぼくたちの家族になってくれてありがとう！」



▲当時の家族募集チラシ